

【研究資料】

バスケットボールの技術史研究に関する一考察 —日本を対象とした研究の場合—

谷釜尋徳¹⁾

Observations on research into the history of basketball technique:
Japan-focused research

Hironori Tanigama¹⁾

Abstract

This paper offers observations on Japan-focused research into the history of basketball technique. The conclusions reached can be summarized as follows.

The “techniques” of this paper consist of “suitable economic solutions to issues of movement task” related to concepts (tactics) aimed at producing breakthroughs in various aspects of offense and defense. This paper suggests that it is necessary to examine the aspect of integration among techniques, as focusing on individual techniques alone is insufficient.

For the primary area of focus in research on history of basketball technique, i.e. clarifying the chronology of technical changes, the following research methods were found to be effective: (1) realizing changes in techniques specific to the movement process, (2) realizing changes in techniques from their relevance to equipment/facilities, (3) realizing changes in techniques from their relation to confrontations between offense and defense.

Historical materials used in research on history of basketball technique were broadly classified as: (1) bibliographic historical documents, (2) semi-bibliographic historical documents, and (3) non-bibliographic historical documents. Specifically, bibliographic historical documents consist of written instructions, newspaper/magazine articles, and commemorative books, while semi-bibliographic documents consist of images, catalogs, and advertisements, and non-bibliographic documents consist of interviews and audio recordings.

The following were found to be contemporary points of significance in researching history of basketball technique: (1) ascertaining the historicity of techniques, (2) identifying factors that change techniques, and (3) determining trends in instruction.

Key words : sport history, technique, movement process, research method

キーワード : スポーツ史, 技術, 運動経過, 研究法

1) 東洋大学
Toyo University

1. はじめに

ここに取り上げる「技術」とは通常、第一義的に「物事をたくみに行うわざ。」¹⁾などと説明され、目的に対する手段や方法を意味する文言である。これをスポーツ運動に限定して用いるとき、技術は一般に「よりよい成果を出すための合理的な身体の動かし方」²⁾と把握されている。

競技スポーツの世界で「技術」概念が注目されるようになったのは、第1回近代オリンピック大会(1896年)以降のことであるという³⁾。この国際大会では、アメリカとヨーロッパの選手間で運動の仕方に相違が見られ、技術が競技力を左右する大きな要因であると認識されたためである。これを一つの契機として、各種競技スポーツの選手ないし指導者は、競技力向上を目的として絶え間ない技術改良に勤しむようになったといえよう。

バスケットボールも例外ではなく、実践の蓄積の上に数々の技術が目覚ましい発達を遂げてきた。日本の競技発達史になぞらえてみても、例えば、大正末期には一般男子でも両手でリリースしていた中・長距離からのシュート技術は、昭和20年代にはワンハンド・シュートへと移行している⁴⁾。本稿では、こうしたバスケットボールの技術的な変遷を捉え、技術の持つ歴史性を考察する分野を「バスケットボールの技術史研究」と称するものである。

これまで、日本を対象としたバスケットボールの技術史研究は、少数の研究者によって主に大正末期～昭和前半期の基礎的技術を対象に試みられてきた⁵⁾⁻¹²⁾。先行研究によって、かつての日本人による基礎的技術の運動経過が復元されつつあるが、その成果は断片的なものに過ぎず、当時代の全体像を捉えるには及んでいない。当該分野が活発化しない要因の一つとして、研究のための方法論が確立されていない点が指摘されている¹³⁾。このことが、バスケットボールの技術史研究に取り組もうとする際の障壁になっているというのである。

そこで本稿では、方法論確立のための一助とすべく、日本を対象としたバスケットボールの技術史研究について若干の考察を加えることとした。スポーツの技術史研究そのものに照射する視点は岸野¹⁴⁾⁻¹⁶⁾の一連の論稿にみられるが、バスケットボールに限定して論及したものは管見では見当たらない。

なお、スポーツ運動技術を歴史的に考察する発想は、日本では岸野らが編んだ『スポーツの技術史』¹⁷⁾を嚆矢とするが、本稿の視点は基本的には同書に依拠する

ものである。

2. バスケットボールの技術史研究の「技術」の捉え方

バスケットボールの技術史研究で主に取り扱われるのが「技術」であることは言うを待たない。しかしながら、この「技術」の枠組みが明確になっていなければ、研究成果として有用な結論を導き出すことは難しい。そこで以下では、本稿におけるバスケットボールの「技術」の捉え方を示すものとした。

①戦術との関連性からみた技術の捉え方

『スポーツの技術史』に投じられた岸野の「スポーツの技術史序説」においては、「技術」は「運動課題の合目的的で経済的な解決法」と規定され、「客観的な『運動経過の合目的的形態』である」と説明されている¹⁸⁾。しかし、バスケットボールのような攻防の選手が同一エリアに混在するボールゲームでは、例えば体操競技のようにして技術が個人レベルで完結することは極めて少ない。岸野もこの点を勘案して、以下のように指摘する。

「球技における場面では、たとえば投げるとは相手側の妨害をフェイントをかけながら味方にパスすること、捕えるとは投げる相手を予測しながら球を奪い取ることであり、タクティック(戦術—引用者注)に基づく両チームの攻防という場で展開するのである。」¹⁹⁾

このようにして、バスケットボールが味方や敵を取り巻く攻防の戦術的な相互関係の上に成立すると考えれば、「バスケットボールの技術史」も戦術的な思考と切り離して理解することはできない。この点は、発生論的な立場から動感身体知としての技術力と戦術力に着目した金子²⁰⁾や、ボールゲームの戦術論を世に問うたシューテラーら²¹⁾、ボールゲームの指導現場における「戦術アプローチ」を提唱したGriffinら²²⁾が強調するところでもある。バスケットボールに限っていても、坂井²³⁾や谷釜ら²⁴⁾、さらにはAmerican sport education program²⁵⁾が同様の見解を示している。

バスケットボールの「戦術」は「局面を開閉するための方法論」²⁶⁾と定義されているが、そこには1対1(個人戦術)、2対2・3対3(グループ戦術)、5対5(チーム戦術)、あるいはアウトナンバーに至るまで、様々な攻防の「局面」が想定されている。先の岸

野による「技術」の定義は「運動課題の合目的的で経済的な解決法」であったが、この「運動課題」がバスケットボールにおいて局面の打開に相当するならば、本稿におけるバスケットボールの技術とは、あらゆる攻防局面を打開しようとする思考（＝戦術）と結びついた「運動課題の合目的的で経済的な解決法」として捉えることができよう。

②「局面構造」と「先取り」の理論からみた技術の捉え方

スポーツ運動に関して、歩く、走るなど動作の反復によって運動意図が達成されるものは「循環運動」と称される一方、投げる、打つ、蹴るなど単一の経過で運動意図が達成されるものは「非循環運動」と呼ばれている²⁷⁾。マイネル²⁸⁾はどのような非循環運動にもその局面の役割から、導入的な準備局面、運動課題を実際に解決していく主要局面、その運動が次第に消失していく終末局面の3分節が成立するとし、これを「局面構造」と称した。バスケットボールのセットシュートに照らせば、準備局面はキャッチ・ホールド、主要局面はセット・リリース、終末局面はフォロー・シューター・シュート後の動き、となる²⁹⁾。

局面構造に基づいて技術の問題を整理しようとするとき、同じくマイネルが提示した運動の「先取り」の理論も看過することはできない。マイネルによる「先取り」の解説を以下に引いておこう。

「先取りというのは、次につづく運動課題をめざして先行する運動局面あるいは運動経過全体がモルフオリギー的に同調を示すことである。その変容は運動の全体構造のなかにはっきりと現われるものであり、それは客観的に明らかに確認できるものである。」³⁰⁾

また、『スポーツ科学辞典』には「先取り」の項目において「スポーツにおける先取りは、運動課題や状況に制約されて、運動行動を次につづく運動局面や運動経過全体にあらかじめ同調させることのなかに見い出される。」³¹⁾と記述されている。次に続く技術が合目的かつ経済的な運動経過を示し得るかどうかは、その技術の「終末局面」が次なる技術の「準備局面」と同調しているかどうかにかかっているといえよう。

こうしたマイネルの理論を、バスケットボールの攻撃戦術に当てはめてみたい。ボール保持者が目の前のディフェンスをドリブルで巧みにかわして、ノーマークでシュートを決める個人戦術の場合を引き合いに出

してみよう。この一連のプレーはドリブルとシュートの技術に大別することができるが、ドリブルというボールを操作しながらの走運動の「終末局面」が、シュートという投運動の「準備局面」を兼ねることによって、両者はスムーズに融合し得るのである。また、ボール保持者の基本姿勢として知られる「トリプル・スレッド・ポジション」も、次なる運動となり得るシュート・パス・ドリブルの準備局面を同時に先取りしている点で、有効性が担保されているといえよう。

本稿におけるバスケットボールの技術とは、こうした「局面構造」や「先取り」の理論に示されるような技術間の融合局面も考慮に入れたものである。

3. バスケットボールの技術史研究の対象と方法

ここでは、バスケットボールの技術史研究が何を対象とし、どのように研究し得るものなのかを検討することにした。スポーツの技術史はスポーツ史研究の個別研究領域に属するものであるが³²⁾ ^{注1)}、もとよりスポーツ史研究はスポーツ科学の一領域をなす一方で、親科学としての歴史学的な原則に制約されている³³⁾。こうした理由から、以下では歴史学の分野における言説や方法論を適宜援用する。

①何を研究するのか

岩村³⁴⁾によると、歴史研究とは「本質的には変化の研究である。」という。ゆえに、これを親科学とするスポーツ史研究も、時系列になぞらえて何がしかのスポーツ現象の「変化」を捉えることを目指さねばならない。したがって、岸野³⁵⁾が技術史研究を指して「運動のテクニクの歴史の変遷を研究する領域である。」と明言しているように、バスケットボールの技術史研究においても、その技術的な変遷を時間軸に乗せて解き明かすことが中心的な研究対象であるといえよう。

しかしながら、これをもって技術史研究の対象のすべてが尽くされているわけではない。岸野³⁶⁾によって「われわれの求めるあたらしいスポーツの技術史の研究は、技の発生と、その技術化の過程を中核とする。」との見解が示されているからである。

先に見たように、岸野のいう「技術」とは、客観的な価値を認められた一般妥当な運動経過を指す。ゆえに、個人によって有効な課題解決法としての運動の仕方が新たに見出されても、それが当人の身体的諸能力によって条件づけられているならば、その運動経過は「技術」として一般化されることはない³⁷⁾。一方、個人が示した運動の仕方に誰しもが模倣可能な技術性

が内包されている場合は事情が異なり、皆がこぞってその運動の習得に勤しむようになる^{註2)}。

これをバスケットボールのワンハンド・シュートの技術史に当てはめてみよう。本稿の対象地域とは離れるが、中距離からのワンハンド・シュートの考案者は、1930年代半ばにアメリカのスタンフォード大学で活躍した Luisetti であると考えられている^{38)~42)}。それまで、中距離からのシュート技術は、一般男子の間でも両手で胸の位置からリリースするチェスト・シュートが一般的^{43)・44)}、指導者の大半はゴール付近からのシュートを除いて片手でリリースすることを認めていなかった^{45)・46)}。そのため、当初は Luisetti の用いたワンハンド・シュートに対して批判的な見解が相次ぎ、このシュート技術には一般妥当的な価値が保証されていなかった。

しかし、その後も Luisetti がワンハンド・シュートを巧みに用いて成功を収め続けると、多くの指導者がチェスト・シュートよりも素早いリリースが可能で、ディフェンスにブロックされ難いワンハンド・シュートの有効性を認識し、各チームにおいてこれを採り入れるようになったという^{47)・48)}。Bunn⁴⁹⁾ の1939年の著作には、かつてゴールと離れたエリアから片手でシュートすることは「悪しき技術」だと考えられていたが、今日(1930年代末)ではあらゆる状況下でワンハンド・シュートが用いられるようになったと明記されている。ワンハンド・シュートの普及状況には東西で差異があったものの、1950年頃にはアメリカ全土に普及していったという⁵⁰⁾。ここに、Luisetti のワンハンド・シュートが誰にでも習得可能な「技術」として定立したのである。

しかし、このことは、ワンハンド・シュートを採り入れた全ての選手が寸分狂わぬ同一の運動経過を獲得したことを意味しているのではない。朝岡⁵¹⁾によれば、スポーツ運動技術には「運動経過に一定のゆとりないし幅というものが許されている」ために、「個々の運動者の体型や体力の違いにも関わらず、一般妥当性というものを獲得することができる」のだという。同じワンハンド・シュートであっても、フォームに特徴や個人差が生じているのはこのためである。

以上より、技術の変遷を捉えるだけでなく、その発生や技術化の過程を時系列で解明することも、バスケットボールの技術史研究の対象であると考えられる。

なお、過去の選手や指導者が、一旦世の中に定立した技術をどのように習得しようとしたのかを探るためには、その試行錯誤の場面として「練習」に着目する必要がある。しかし、日本のバスケットボール史研究

のうち「どのように練習したのか」を対象としたものは、管見では吉井⁵²⁾の論稿に記述が見られる程度である。

②どのように研究するのか

バスケットボールの技術史研究において、過去の人々の運動経過を再構成するためにはどのような方法が想定されるのであろうか。以下では、大正末期～昭和前半期あたりを対象期間とした先行研究の成果をもとに、バスケットボールに関する技術的な変遷の導き方を整理してみることにしたい。

(1) 運動経過に特化して技術の変遷を捉える方法

及川⁵³⁾は指導書の丹念な分析を通して、大正末期～昭和初期のドリブル技術の変遷を明らかにした。大正末期～昭和3(1928)年頃までのドリブルは、ボールを覆うような低い体勢で、腕は前方に伸ばした状態で行っていた。それが、昭和4(1929)年頃からの指導書の記述では、ドリブルは肘や手首の関節を柔軟に用いてボールをコントロールし、バウンドの高低差を使い分ける技術へとシフトしていったという。また、及川論文では、こうした運動経過の解明にとどまらず、ドリブルに期待された役割がボールキープから攻撃的な手段へと変化したことにも言及している。

単行書の場合、執筆から発行までのタイムラグを考慮する必要はあるにしても、指導書の記述を時系列に沿って分析する方法は、技術的な変遷を捉えるための有効な手段だといえよう。

(2) 用具・施設との関連性から技術の変遷を捉える方法

バスケットボールに関する用具の改良と技術の発達を関連づけた研究も試みられてきた。ゲーナーがいうように「用具の使用が行おうとする運動のやり方に大きな影響を与えている」⁵⁴⁾とすれば、この視点からの考察はシンプルに結論を導き出し得る可能性を持っているといえよう^{註3)}。

谷釜⁵⁵⁾はスポーツ用具店の広告や雑誌記事等の分析を通して、大正末期から昭和20年代までの国産ボールの製法や性能の変遷を明らかにし、それを指導書の記述に依拠しながらドリブル技術の発達と結びつけて論じている。戦前のドリブル技術は、イレギュラー・バウンドを前提とする低品質のボールの影響で、ボールを常に注視して身体の正面で操作していたため、ドリブルはシュートやパスが困難な状況下での単純な「つなぎ」のプレーでしかなかった。それが、昭和20年代にイレギュラーしにくいボールが登場しバウンドの方向が予測可能になったことで、ドリブラーがボールを

視界から外して扱える条件が整えられる。すると、昭和30年代に至ってドリブル技術は単なる「つなぎ」の段階を脱して「ボールキープ」の役割を担い、さらには得点に直結し得る攻撃的技術にまで昇華していったという。日本人のドリブル技術は、ボールの改良を後ろ盾として発達してきたことがわかる。

なお、この時代のドリブル技術は、用具のみならず「施設」にも影響を受けていた。昭和20年代まで大半の競技者は「屋外」のコートでプレーしていたが、一部の板張りのコートを除いて、屋外コートは平坦な状態に保たれてはいなかった。そのため、上記のボールの性能とも相まって、ドリブル時にはイレギュラー・バウンドを想定して、ボールを視野に入れた姿勢を確保する運動経過が必然化したという⁵⁶⁾。

『スポーツの技術史』において示された用具・施設の改良と技術の発達を結びつける発想は⁵⁷⁾、多くのスポーツ種目に当てはまる比較的分かりやすい研究モデルであるかもしれない。ただし、とある用具にドラスティックな改良がみられたとしても、それが必ずしも選手の運動経過の目立った発達を約束しないところには留意しておくべきであろう。

(3) 攻防の対峙関係から技術の変遷を捉える方法

バスケットボールは攻防の対峙関係において成立しているが⁵⁸⁾、⁵⁹⁾、過去の技術に着目する場合にもこの視点は有効に作用する。

谷釜⁶⁰⁾は、日本における中・長距離からのシュート技術のリリースが両手から片手へと移行していく過程の解明に取り組んだ。大正末期～昭和初期頃の指導書に解説されていたのは、胸の前にボールを構えて両手でリリースするチェスト・シュートと、ボールを腰付近まで下げ反動をつけて同じく両手でリリースするアンダーハンド・シュートであったが、ディフェンスが接近した場合に阻まれ難いという観点からチェスト・シュートの方が選び採られていた。昭和10(1935)年頃より、チェスト・シュートに関して、打点の低さやディフェンスの接近を意識するあまり慌ててリリースしてしまうという欠点が指摘されるようになり、それよりも打点が高く素早いリリースが可能なワンハンド・シュートの技術を習得する必要性が生じてくる。

ワンハンド・シュートは昭和20年代初頭にはアメリカの技術として日本に伝わっていたものの、これは体の小さな日本人には習得が不可能だと考えられていた。ところが、昭和25(1950)年に日本人と同等の体格を有するハワイ日系2世チームが来日してワンハンド・シュートを披露したことで⁶¹⁾、⁶²⁾、日本人の間でも当該技術の一般妥当性が認知されるに至り、以降、一般男

子の間ではワンハンド・シュートの技術が普及していったという。

以上、先行研究に基づいてバスケットボールの技術史研究における方法の一事例を提示した。この他にも、戦術の発達と関連づけて技術の変遷を辿ることや^{注4)}、競技規則の変更に伴って必然化した技術の発達ないし抑制^{注5)}を捉える手法が想定される。ただし、技術の変遷は単独の要因によって引き起こされるものではなく、多様な要因が複合的に絡み合っている事情は考慮しておかねばならない。

4. バスケットボールの技術史研究の史料

バスケットボールの技術史研究における方法論を考察する場合、「史料」の問題を避けて通ることはできない。歴史学研究において過去の現象を再構成する際には「それに基づいて歴史の対象たる人間社会の過去の状態ならびにその変遷を考察する根拠⁶³⁾としての史料に依拠した記述が前提となるためである。史料学分野では、「過去と現在を結ぶ確実な媒体は『史料』だけである。」⁶⁴⁾と断じられている。ゆえに、過去の技術を知る手掛かりの多くは、当時代の痕跡(=史料)に求めなければならないといえよう。

それでは、バスケットボールの技術史研究ではどのような史料を活用し得るのであるだろうか。史料の分類論は福井⁶⁵⁾の著作に詳しい^{注6)}。福井⁶⁶⁾は文字で記された情報源としての「文献」を基準に、文献史料、準文献史料、非文献史料の3つに史料を分類した。

以下では、福井の分類を念頭に置きつつ、先行研究で用いられてきた史料を中心に、各々の特徴を述べていきたい。

①文献史料

バスケットボールの技術史研究において最も頻繁に活用される文献史料が「指導書」の類であろう。昭和初期に例を取れば、安川伊三⁶⁷⁾の『籠球競技法』や李想白⁶⁸⁾の『指導籠球の理論と実際』などがこれに該当する^{注7)}。指導書には、時として図版を付した詳細な技術解説が期待できるため、その内容を時系列で整理していけば技術の変遷を解明できる可能性がある。

しかし、指導書は必ずしも万能な史料とはなり得ない。指導書が教える技術の情報は、その時代(あるいは著者)の理想像に過ぎないケースもあり、「実際のゲームの中でそうした理想が実現する場面は限られている。」⁶⁹⁾からである。また、単行書の場合は執筆から

刊行までのタイムラグを考慮すれば、紙面に盛られた技術に関する内容が発行時点における最新情報であるとは限らない。

こうした点を補完できる文献史料として、「新聞記事」や「雑誌記事」^{註8)}をあげることができる。これらの史料には、試合の観戦記や大会等の好評が技術面も含めて掲載される場合があるからである。記録者の主観性は否めないにしろ、そこには実際の試合で用いられた技術の様相が記述されている可能性があるばかりか、比較的速報性が高いため前述のタイムラグの問題もある程度解消されるといえよう。ただし、一般的に新聞や雑誌は草の根レベルの大会を記事にすることは少ないので、この手の史料から再構成される技術史は、一部のトップレベルに焦点を絞った「少数者の歴史」になることが懸念される⁷⁰⁾。トップレベルの技術・戦術の発達は、一定のタイムラグを経てすべての競技レベルで個人やチームの習熟段階や指導の方向性を確認するための知見を提供するとはいえ⁷¹⁾、新聞や雑誌にもやはり史料的な限界を指摘しなければならない。

トップレベルに属さない多くの未熟練者の技術史を明るみに出すには、「記念誌」^{註9)}の活用が有効に作用すると考える。競技レベルを問わず学校や企業、団体を単位として編纂される『〇〇年史』などといった冊子には、当該組織の発展の歴史が語られている。そこには、卒業生や指導者らの回顧談が、技術にまつわる諸情報を伴って掲載されることもある。ただし、その述懐の信憑性については慎重な姿勢を取らねばならない。

なお、上記のいずれの文献史料を扱うにしても、大学生以上の一般男子、それもトップレベルを対象とした文献が圧倒的に多くを占めていることは否めない。この意味では、若年層や女性、未熟練者の技術史を解明するにあたっては、結局のところ史料的な限界が立ちだかっていることを確認しておきたい。

②準文献史料

かつてのバスケットボール選手の技術を探るためには、指導書や雑誌等の技術解説に添えられた図版が貴重な手掛かりとなる。これは、岸野の史料分類において「図示による報告」に相当する。岸野はこの手の史料を「文献史料によっては具象化できない側面を理解するために必要不可欠の史料であり、施設・用具・服装・技術などの問題を解明していく場合にたいへんに役立つものである。」⁷²⁾と述べ、その重要性を説いている。

確かに、指導書の技術解説（文字）とともに選手の運動場면을撮影した写真やイラストを見れば、当該技

術の全体像を類推することが容易になるように思われる。しかし、本稿でいう技術が「運動経過」であるとの視点に立てば、一連の流れを持つ運動を人為的に切り取った静止画像（連続写真も含む）からは、その運動感覚やコツの問題にまでは立ち入れないといわねばならない。また、仮に選手がパスをリリースしたかに見える図版があったとしても、それがパスをリリースした直後なのかキャッチする直前なのかは、静止画像を一覧しただけでは実のところ正確な判断はできないのである。したがって、図版は技術史の解明にとって重要な情報を提供するが、とある運動経過を理解するための決定的な情報は盛られていないといわねばならない。映像史料であれば、こうした問題はある程度払拭されることになるが、少なくとも従来の先行研究が主な対象としてきた大正末期～昭和前半期においては、ビデオ等の映像機器は一般に普及していなかった。

カタログ^{註10)}や広告^{註11)}もビジュアルな側面から技術史に迫るためには貴重な媒体となる。当該史料の性格上、そこに掲載されるのは選手の運動場面ではなく、ボールやシューズといった用具である場合が多いため、そこから直接的な技術情報の入手を期待すべきではない。しかし、前述したように、用具の改良と技術の発達が深く結び付いていることを思えば、販売促進のために用具の最新情報を掲載するカタログや広告にも史料的な価値が認められるといえよう。

③非文献史料

研究対象とする年代によっては、当時のバスケットボールの技術に関する諸情報を実体験として記憶する人物が生存している可能性がある。この当事者の「記憶」は聞き取り調査によって再現され、それが活字化されれば貴重な「インタビュー史料」となり得る⁷³⁾。岸野も「近代史の研究では、自己のテーマについて見聞している人も生存しており、回顧談や思い出を尋ねて、筆記や録音することも大切である。いな体育史研究の場合には、こうした現地調査が絶対に必要である。」⁷⁴⁾と述べ、その必要性を強調している。

日本のバスケットボール史研究の分野で、こうした手法によって過去の再構成を試みたのが及川である。例えば及川⁷⁵⁾は、大日本バスケットボール協会兵庫支部で昭和6（1931）年の発足当初より運営に関わっていた木戸乙男に聞き取り調査を実施し、当時の兵庫県におけるバスケットボール事情を詳らかにした。

無論、当事者の記憶の信憑性や、そこから採集した技術に関する情報を論文中でどのように記述するのかは一考の余地があるにしろ、こうしたインタビュー史

表1 バスケットボールの技術史研究に関する史料分類

| 史料分類 | 媒体 | 一次史料の具体例 |
|-------|-----------|--|
| 文献史料 | 文字 | <ul style="list-style-type: none"> ・指導書 ・雑誌記事 ・新聞記事 ・記念誌 ・メモ書き ・ルールブック ・スコアブック ・大会プログラム ・カタログや広告のキャッチコピー など |
| 準文献史料 | 静止画 | <ul style="list-style-type: none"> ・指導書の写真やイラスト ・雑誌記事の写真やイラスト ・新聞記事の写真やイラスト ・カタログや広告の写真やイラスト ・絵葉書 ・スナップ写真 など |
| | 動画 | <ul style="list-style-type: none"> ・試合や練習を撮影したVTR など |
| 非文献史料 | 記憶 | <ul style="list-style-type: none"> ・インタビュー資料 など |
| | 音声 | <ul style="list-style-type: none"> ・ラジオの実況中継 など |
| | 施設・用具（原物） | <ul style="list-style-type: none"> ・ボール ・シューズ ・ウェア ・ゴール ・コート など |

※史料の性格分類にあたっては、福井の『歴史学入門』（2006、岩波書店）を参考にした。
また、一次史料の具体例は、大正末期～昭和前半期を研究対象とした場合を想定している。

料は、バスケットボールの技術史研究に立ちほだかる史料的な限界を克服する手段ともなり得る。指導書や雑誌・新聞記事等の記述対象とはなり難い、若年層や女性、未熟練者のバスケットボールの技術史が、当事者の記憶を通して克明に浮かび上がってくる可能性があるためである。

その他、技術史に関する非文献史料として、「音声史料」をあげることができる。日本のバスケットボール競技では、昭和9（1934）年の関東大学リーグ戦よりラジオ放送がはじまっているが⁷⁶⁾、仮に当時の音声が何らかの媒体に録音されて残存していれば、実況中継の様相から技術に関する情報が得られるかもしれない。なお、この当時のバスケットボールのラジオ放送は、比較的多くの聴取者を持っていたという⁷⁷⁾。

以上、バスケットボールの技術史研究における史料について検討してきたが、各々の史料は異なる特徴を持つことから、多様な史料をつきあわせて上で史実を導き出すことが肝要であると考えられる。

試みに、3つの史料分類に関する諸情報を整理した一覧表を掲げておきたい。

5. バスケットボールの技術史研究の今日的意義

歴史的な研究は、ただ単に過去の出来事を時系列で明みに出すだけでは十分ではなく、当該研究課題を遂行する上での「今日的意義」が問われることになる。今日的な問題点に端を発して、それを解決しようとする手掛かりを歴史的な世界に見ようとする姿勢が肝要との考え方があり得るためである^{注12)}。無論、このことはバスケットボールの技術史研究においても例外ではない。以下、この研究分野が今日の実践現場にいかに関与し得るか検討していきたい。

①技術の持つ歴史性の把握

マイネルはスポーツ運動技術を指して、「実践のなかで発展し、実践によって変化し、たえず修正や改良が行なわれ、また全体的に、あるいは部分的に古くなっていく」⁷⁸⁾と説いている。より良い成果を求め続ける限りにおいて、技術は「時間的制約」⁷⁹⁾から逃れることはできないのである。

今日のバスケットボールの実践現場で用いられている技術は、過去の選手や指導者による試行錯誤の蓄積の上に成立しているのであって、その意味では、あく

まで今のところ有効性を認められているに過ぎない。こうした技術の持つ歴史性を無視して、今のところ有効な技術のみに固執して、「鑄型化」^{注13)}された運動経過の習得をひたすら計ろうとする方法は、技術の発展を阻害してしまうことになる⁸⁰⁾。

バスケットボールの実践現場においても、既存の技術の習得を目指すことはもちろん、さらなる新技術への試行錯誤は必須であるといわねばならない。吉井が「私は現在バスケットボール界で絶対の真理であると信じられている理論やプレーの原則のなかで、随分疑わしいと思われるものがあるのではないかと感じている。新しい基礎技術を発見するためには、まずこの検討からはじめなければならない。」⁸¹⁾と指摘する通りである。

②技術を変化させる要因の特定

金子は体操競技のコーチングをめぐる、「技は時間とともに変化していくものならば、技を変化させる要因も含めて、その技の本質的構造が考察される必要がある。」⁸²⁾と説く。この「変化させる要因」を特定するためには、歴史的事実にヒントを求めることが妥当であると考えられる。

体操競技に限らず、過去において、とある要因が技術的な変化を引き起こしたことが確認されれば、その情報は上述した技術の持つ歴史性の問題とも絡んで、今後の技術発達を目指す上での貴重な手掛かりとなる。例えば、昭和前半期においてバスケットボールのボールの改良が日本人のドリブル技術の発達を促したという史実⁸³⁾は、今後、仮にボールにドラスティックな変化が起こった際に、またしてもドリブル技術が大きく変わる可能性があることを示唆しているのである。

③指導の方向性の確認

吉井によると、バスケットボールの技術の歴史的な発達段階は、今日におけるおおよその指導順序を示しているという。とりわけ吉井が強調するのは、「技術の発達史における発達段階と初心者に対する指導段階は、基本的には同じであるべきである。」⁸⁴⁾という点である。吉井が前提とするのはアメリカの発達史であるが、より有効な技術を求めた過去の人々が未来への見通しもなく試行錯誤していた一方、競技の誕生から今日に至るまでの技術の発達段階を知り得る現代人は、初心者に対して「次段階への発達を考慮しての指導をすることができる」⁸⁵⁾のだという。

こうした初心者指導の具体的方法について、吉井は以下のような見解を示している。

「初心者がバスケットボールの技術を習得するには、習得すべき順序があり、段階があるけれども、その習得した技術の強弱は、それまでに習得したバスケットボールのより基礎的な力の強弱によって大きく影響されるものである。それゆえに、ある段階のある技術をより強力なものにしようと考えれば、もう一度最初の段階にもどってバスケットボールの基礎的な力の強化をより一層はからなければならぬ。」⁸⁶⁾

吉井の見解に依拠すれば、バスケットボールの技術には歴史的な発達段階に基づく階層的な指導順序があり、必要に応じて過去に有効性を発揮した技術に立ち戻ってみることも、特に初心者指導の場合には有効であるといえよう^{注14)}。技術発達史の中で古くなった運動形態であっても、その習得が学習行為の目標達成に役立つと認められ、個人の学習過程において段階的に位置づけられる場合には「技術」とみなされるのである⁸⁷⁾。

以上より、バスケットボールの技術史の解明は、今日の実践現場においても価値ある知見を提供し得るといえよう。

6. おわりに

本稿において検討した結果は、以下のように整理することができる。

バスケットボールの技術史研究における「技術」とは、あらゆる攻防局面を開閉しようとする思考(=戦術)と結びついた「運動課題の合目的的で経済的な解決法」のことであると見なされた。また、個々の技術に着目するだけでは十分ではなく、技術間の融合局面を捉えることの必要性が示唆された。

バスケットボールの技術史研究の主な対象は、技術的な変遷を時系列で明確にすることであるが、その手立てとして、(1)運動経過に特化して技術の変遷を捉える方法(2)用具・施設との関連性から技術の変遷を捉える方法(3)攻防の対峙関係から技術の変遷を捉える方法が有効であることがわかった。

バスケットボールの技術史研究で用いる史料は、(1)文献史料(2)準文献史料(3)非文献史料に大別することで、具体的に文献史料には指導書・新聞記事・雑誌記事・記念誌などが、準文献史料には図版・カタログ・広告などが、非文献史料にはインタビュー史料や音声史料などが該当することが確認された。

バスケットボールの技術史研究の今日的意義は、(1) 技術の持つ歴史性が把握できること (2) 技術を変化させる要因を特定できること (3) 指導の方向性を確認できることに見出された。

〈 注 〉

注1) 稲垣はスポーツ史の研究は個別研究領域と一般研究領域に大別できるとし、前者としてスポーツ施設・用具史、スポーツ学説史、スポーツ技術史、スポーツ教育史、スポーツ法制史、スポーツ競技種目史、スポーツ思想史、スポーツ人物史、スポーツ用語史、スポーツ産業史、スポーツ修練史、スポーツ形態史、スポーツ興行史、スポーツ宗教史、祭祀スポーツ史、健康スポーツ史、医療スポーツ史、民族スポーツ史などを、後者としてスポーツ通史、世界スポーツ史、時代別スポーツ史、地域スポーツ史、を例示している(稲垣正浩(1995)スポーツ史研究の対象と領域。稲垣正浩・谷釜了正編著、スポーツ史講義。大修館書店、pp.11-14)。

注2) このことを簡潔に説明した佐藤の見解を以下に引いておきたい。

「課題達成に成果を上げた個人技術は、他の選手たちにもその成果が試され、有効性が検証されると、一般妥当な運動技術と認められるようになる。つまり、他の選手たちが動きの模倣を試みる中で、課題達成にとって重要な動きだけを抽出し、非本質的な動きを排除していく作業を経て、1つの動きのかたちが確認されるようになる(技術の伝播)。これが指導の対象となる動きの原型となり、誰にでも適用可能な動き方の図式化が行われる(図式技術の定立)。(佐藤徹(2015)スポーツにおける技術。中村敏雄ほか編、21世紀スポーツ大事典。大修館書店、p.473)

上記引用文中の「図式技術」とは、金子によって次のように説明されている。

「<図式技術>とは、私一般の運動形態としての技術、別言すれば、現時点でだれもが『そう動きたい』という目標像になる超越論的な動感身体知としての間動感性をもつ公共的技術なのです。」(金子明友(2005)身体知の形成(上)。明和出版、p.224)

注3) 運動用具史研究の必要性をいち早く説いた岸野は、その方法上の留意点として「身体運動の側面から人間の問題としてアプローチしていかなければならない。」(岸野雄三(1973)体育史：体育史学への試論。大修館書店、p.90)と指摘している。この指摘は、用具そのものの変遷にとどまらず、用具を使ってスポーツを行う人間の「スポーツ運動技術」との関連性の追及が肝要であることを示唆するものである。加えて岸野が、「施設が改良され用具が開発されることによって、技術も高度になり、逆に技術が高度になるにつれて、施設や用具も改良されてくる。」(岸野雄三(1972)スポーツの技術史序説。岸野雄三・多和健雄編、スポーツの技術史。大修館書店、p.26)と述べているように、スポーツに関する「用具」と「技術」との間には相互依存性が認められる。なお、岸野は「施設や用具の問題は、スポーツ技術史にとって本質的な一分野を構成

する。」(岸野雄三(1972)スポーツの技術史序説。岸野雄三・多和健雄編、スポーツの技術史。大修館書店、p.26)との見解を提示している。

注4) 及川によれば、昭和初期の日本のバスケットボール界ではアメリカのチーム戦術の導入が試みられた際、日本人がその時点で獲得していた技術水準との兼ね合いで妥当な攻撃戦術が選り採られていったという(及川佑介(2011)松本幸雄と「籠球研究」(昭和9~11年)：日本バスケットボール史の一齣。叢文社、p.175)。

注5) 競技規則による技術の抑制という視点からは、昭和初期まで合法的に用いられていた「ジャグリング」という技術をあげておきたい。これは、ボールをフロアにバウンドさせながら移動するドリブルとは異なり、ディフェンスの接近時にボールを一旦空中(ディフェンスの背後)に放り上げ、その間にディフェンスの横を通り抜けて再び補球する技術であった。ジャグリングはディフェンスを抜き去る技術として普及していたが、昭和13(1938)年以降は競技規則で禁止(抑制)されたという(小谷究(2013)今日採用されなくなった技術を考える：日本におけるバスケットボール競技の場合。ひすば、(85)：3-4)。

注6) スポーツ史研究の史料分類は岸野によってなされている。岸野は、スポーツ史研究の史料を「文献(伝承)史料」と「遺物(遺跡)史料」に大別し、さらに前者の下位に「文字による報告」「図示による報告」「口伝による報告」を、後者には「施設」「用具」を位置づけている(岸野雄三(1973)体育史：体育史学への試論。大修館書店、pp.273-275)。しかし、岸野は同書において詳細な史料分類論を展開しているわけではないので、ここでは福井の分類論の方を参考にした。

注7) この時期に刊行された指導書については、近代日本の体育・スポーツ関連文献の情報を網羅した『体育・スポーツ書解題』に詳しい(木下秀明・能勢修一編著(1981)体育・スポーツ書解題。不昧堂出版)。

注8) 従来の研究が対象としてきた大正末期~昭和前半期に限れば、バスケットボールに特化した雑誌は以下のものをあげることができる。

- ・『籠球』(大日本バスケットボール協会編纂委員会編、1930~42発行)
 - ・『バスケットボール』(葉師寺尊正編、1930~31発行)
 - ・『籠球研究』(松本幸雄編、1934~36発行)
 - ・『バスケットボール』(日本バスケットボール協会編、1947~73発行)
 - ・『籠球日本』(東京運動社編、1936~不明)
 - ・『バスケットボールダイジェスト』(兵庫県バスケットボール教室編、1955~59発行)など
- また、比較的バスケットボールの記事を取り上げているスポーツ系雑誌としては、以下のものがあげられる。
- ・『体育と競技』(大日本体育学会編、1922~40発行)
 - ・『体育研究』(体育研究協会編、1933~50発行)
 - ・『アサヒスポーツ』(朝日新聞社編、1923~43/1948~54発行)など

注9) これに該当するものを、以下にいくつか列記しておきたい。

- ・山口高等学校籠球班編(1941)山口高等学校籠球班後援会誌 第二号。山口高等学校籠球班

- ・藤田修一編 (1977) 新潟県バスケットボール史 (戦前篇). 藤田修一
- ・慶應義塾バスケットボール三田会編 (1980) 慶應義塾体育会バスケットボール部50年史. 慶應義塾バスケットボール三田会
- ・杉野クラブ編 (1980) 杉野女子大学バスケットボールクラブ30周年記念誌. 杉野クラブ
- ・柏葉会編 (1981) 一高籠球部史. 柏葉会
- ・日本バスケットボール協会広報部編 (1981) バスケットボールの歩み: 日本バスケットボール協会50年史. 日本バスケットボール協会
- ・早稲田大学 RDR 倶楽部編 (1983) RDR60. 早稲田大学 RDR 倶楽部
- ・一球会編 (1985) 一球会史: 第一東京市立中学校時代. 一球会
- ・兵庫県バスケットボール協会50年史編集委員会編 (1985) 先賢の足音: 兵庫県バスケットボール協会50年史. 兵庫県バスケットボール協会
- ・明治大学バスケットボール部 OB 会編 (1995) 明治大学体育会バスケットボール部70年史. 明治大学バスケットボール部 OB 会
- ・早稲田大学 RDR 倶楽部編 (2002) 早稲田大学バスケットボール部80年史 RDR80. 早稲田大学 RDR 倶楽部など

注10) この類の史料のいくつかを、以下に列記しておきたい。

- ・美満津商店懐中用定價表 (1915) 美満津商店
- ・Shimada sporting good' s catalog (1933) シマダ運動具製作所
- ・Tamura Yuido' s catalog 中等及高等専門学校之部 (1936) 都村有為堂体育器械製作所

注11) 雑誌等に掲載されたこの類の史料は、数えれば枚挙にいとまがない。試みに、大日本バスケットボール協会の機関誌『籠球』の創刊号から第5輯 (1930~32) までを一覧すると、バスケットボール用具の関連だけでも東京運動社、美津濃、イシイカジマヤ等の広告が掲載されている。

注12) 関連の記述をいくつか例示すると、堀米による「将来への決断のために、われわれは過去に問いかける。」(堀米庸三 (1964) 歴史をみる眼. 日本放送出版協会, p.61), 溪内による「過去への関心は、未来への関心ないし不安の一面です。」(溪内謙 (1995) 現代史を学ぶ. 岩波書店, p.16), 福井による「過去を問うことは、じつはその根において現在を問うことにつながっているのである。」(福井憲彦 (2006) 歴史学入門. 岩波書店, p.11) といった見解をあげることができる。また、スポーツ史研究の分野においては、稲垣が「スポーツ史とは、スポーツ文化の『現在』を知ることであり、そのための重要な手がかりを提供する学問分野の一つである。」(稲垣正浩 (1995) スポーツ史とはなにか. 稲垣正浩・谷釜了正編著, スポーツ史講義. 大修館書店, p.3) と言及している。

注13) 金子によると「鑄型化」とは次のような運動認識を意味しているという。

「鑄型化とは、字義通りに動きかたを鑄型にはめ込むように変形させる営みが意味されています。指導者が学習者に動き方を教えるときに、あらかじめ規定さ

れた動きかたの鑄型を設定しておいて、それに強制的にはめ込んでいくという運動指導上の考え方がそこに伏在しているのです。」(金子明友 (2007) 身体知の構造: 構造分析論講義. 明和出版, p.110)

注14) 本稿でスポーツ運動技術の歴史性を示すために適宜文献を引いてきたマイネル、岸野、金子と比べると、技術史研究の成果を具体性を持って指導現場に還元しようとした点に、吉井理論の特徴の一つを見出すことができる。

〈文 献〉

- 1) 新村出編 (2008) 広辞苑 第五版. 岩波書店, p.643
- 2) 渡辺良夫 (2013) スポーツの技術と戦術. 大修館書店編集部編, 最新高等保健体育教授用参考資料. 大修館書店, p.428
- 3) 金子明友 (1968) 運動技術論. 岸野雄三代表, 序説運動学. 大修館書店, p.98
- 4) 谷釜尋徳 (2010) 大正期~昭和前半期の日本におけるバスケットボールのシュート技術の変遷: 中・長距離からのワンハンド・シュートの受容過程. 体育学研究, 55 (1): 1-16
- 5) 牧山圭秀 (1972) バスケットボールの技術史. 岸野雄三・多和健雄編, スポーツの技術史. 大修館書店, pp.373-400
- 6) 藤田修一 (1980) バスケットボールの基礎技術の歴史的考察. 新潟大学教育学部高田分校研究紀要, (24): 125-135
- 7) 二杉茂 (2003) バスケットボールにおけるワンハンドショットの社会史的研究. 神戸学院大学人文学部紀要, (23), : 103-129
- 8) 及川佑介 (2005) 初期バスケットボール競技におけるドリブル技術の防御性と攻撃性: 李想白著『指導籠球の理論と実際』(昭和5年)を基軸として. 国士館大学体育・スポーツ科学研究, (5): 13-23
- 9) 谷釜尋徳 (2008) 日本におけるバスケットボールの専用球の改良とそれに伴うドリブル技術の発達に関する技術史的考察. スポーツ運動学研究, (21): 45-59
- 10) 谷釜尋徳 (2009) 日本におけるバスケットボールの競技場に関する史的考察: 大正期~昭和20年代の屋外コートの実際に着目して. スポーツ健康科学紀要, (6): 21-38
- 11) 二杉茂 (2009) ワンハンドショットのメッセンジャーたち: バスケットボールにおける社会史的研究. 晃洋書房
- 12) 谷釜尋徳 (2010) 大正期~昭和前半期の日本におけるバスケットボールのシュート技術の変遷: 中・長距離からのワンハンド・シュートの受容過程. 体育学研究, 55 (1): 1-16
- 13) 及川佑介 (2015) 黎明期における日本バスケットボールの技術・戦術史 (大正末期~昭和初期). スポーツ史学会第28回大会組織委員会編, スポーツ技術・戦術史の現状と課題: スポーツ史学会第28回大会特別講演・シンポジウム報告書. スポーツ史学会第28回大会組織委員会, p.30
- 14) 岸野雄三 (1968) 運動学の対象と研究領域. 岸野雄三代表, 序説運動学. 大修館書店, pp.1-47
- 15) 岸野雄三 (1972) スポーツの技術史序説. 岸野雄三・多和健雄編, スポーツの技術史. 大修館書店, pp.1-37

- 16) 岸野雄三 (1973) 体育史：体育史学への試論. 大修館書店, pp.83-86
- 17) 岸野雄三・多和健雄編 (1972) スポーツの技術史. 大修館書店
- 18) 岸野雄三 (1972) スポーツの技術史序説. 岸野雄三・多和健雄編, スポーツの技術史. 大修館書店, p.14
- 19) 岸野雄三 (1968) 運動学の対象と研究領域. 岸野雄三代表, 序説運動学. 大修館書店, p.23
- 20) 金子明友 (2005) 身体知の形成 (上) 運動分析論講義・基礎編. 明和出版, pp.226-227
- 21) シュテラー・コンツァック・デブラー：唐木國彦監訳 (1993) ボールゲーム指導事典. 大修館書店, p.36
- 22) Griffin,L.,Mitchell,S.,Oslin,J (1997) Teaching sport concepts and skills. Human Kinetics, p.8
- 23) 坂井和明 (1996) ボール運動の技術と戦術. 吉田茂・三木四郎編, 教師のための運動学. 大修館書店, pp.246-254
- 24) 谷釜尋徳・藤田将弘・芦名悦生 (2013) 複雑系な思考からみたバスケットボールの練習における戦術と技術との関連性について. スポーツ健康科学紀要, (10) : 65-77
- 25) American sport education program (2007) Coaching basketball: Technical and tactical skills. Human Kinetics
- 26) 日本バスケットボール協会編 (2002) バスケットボール指導教本. 大修館書店, p.109
- 27) 吉田茂 (1990) 運動構造の運動学的認識. 金子明友・朝岡正雄編著, 運動学講義. 大修館書店, p.94
- 28) マイネル：金子明友訳 (1981) スポーツ運動学. 大修館書店, p.156
- 29) 日本バスケットボール協会編 (2002) バスケットボール指導教本. 大修館書店, p.64
- 30) マイネル：金子明友訳 (1981) スポーツ運動学. 大修館書店, p.229
- 31) バイヤー編：朝岡正雄監訳 (2001) スポーツ科学辞典第三版. 大修館書店, p.186
- 32) 稲垣正浩 (1995) スポーツ史研究の対象と領域. 稲垣正浩・谷釜了正編著, スポーツ史講義. 大修館書店, pp.11-13
- 33) 岸野雄三 (1977) スポーツ科学とは何か. 朝比奈一男・水野忠文・岸野雄三編著, スポーツの科学的原理. 大修館書店, p.99
- 34) 岩村忍 (1972) 歴史とは何か. 中央公論社, p.55
- 35) 岸野雄三 (1973) 体育史：体育史学への試論. 大修館書店, p.83
- 36) 岸野雄三 (1972) スポーツの技術史序説. 岸野雄三・多和健雄編, スポーツの技術史. 大修館書店, p.24
- 37) 金子明友 (1968) 運動技術論. 岸野雄三代表, 序説運動学. 大修館書店, p.107
- 38) Sharman,B. (1965) Sharman on basketball shooting. Prentice Hall, pp.64-65
- 39) Hollander,Z. (1973) Madison Square Garden. Hawthorne, p.76
- 40) 吉井四郎 (1977) バスケットボールのコーチング：基礎技術編. 大修館書店, pp.30-34
- 41) 吉井四郎 (1986) バスケットボール指導全書1：コーチングの理論と実際. 大修館書店, pp.192-195
- 42) レイダー：平井肇訳 (1987) スペクテイタースポーツ. 大修館書店, p.136
- 43) Bliss (1929) Basketball. Lea & Febiger, p.72
- 44) Lambert (1932) Practical basketball. Athletic Journal, 51
- 45) Winter,T. (1962) The triple-post offense. Prentice Hall, p.180
- 46) Sharman,B. (1965) Sharman on basketball shooting. Prentice Hall, pp.64-65
- 47) Sharman,B. (1965) Sharman on basketball shooting. Prentice Hall, pp.64-65
- 48) Hollander,Z. (1973) Madison Square Garden. Hawthorne, p.76
- 49) Bunn (1939) Basetball methods. Macmillan, p.141
- 50) 谷釜尋徳・佐野昌行 (2010) 1920~40年代のアメリカにおけるバスケットボールのショット技術の変遷：中距離からのワンハンド・ショットの普及まで. スポーツ健康科学紀要, (7) : 29-30
- 51) 朝岡正雄 (1999) スポーツ運動学序説. 不昧堂出版, p.193
- 52) 吉井四郎 (1968) バスケットボールのトレーニング. 猪飼道夫ほか編, 種目別現代トレーニング法. 大修館書店, pp.516-519
- 53) 及川佑介 (2005) 初期バスケットボール競技におけるドリブル技術の防御性と攻撃性：李想白著『指導籠球の理論と実際』（昭和5年）を基軸として. 国士館大学体育・スポーツ科学研究, (5) : 13-23
- 54) ゲーナー：佐野淳・朝岡正雄監訳 (2003) スポーツ運動学入門. 不昧堂出版, p.71
- 55) 谷釜尋徳 (2008) 日本におけるバスケットボールの専用球の改良とそれに伴うドリブル技術の発達に関する技術史的考察. スポーツ運動学研究, (21) : 45-59
- 56) 谷釜尋徳 (2009) 日本におけるバスケットボールの競技場に関する史的考察：大正期～昭和20年代の屋外コートの実際に着目して. スポーツ健康科学紀要, (6) : 21-38
- 57) 岸野雄三 (1972) スポーツの技術史序説. 岸野雄三・多和健雄編, スポーツの技術史. 大修館書店, p.26
- 58) 岸野雄三 (1968) 運動学の対象と研究領域. 岸野雄三代表, 序説運動学. 大修館書店, p.23
- 59) 稲垣安二 (1989) 球技の戦術体系序説. 梓出版社, pp.49-50
- 60) 谷釜尋徳 (2010) 大正期～昭和前半期の日本におけるバスケットボールのシュート技術の変遷：中・長距離からのワンハンド・シュートの受容過程. 体育学研究, 55 (1) : 1-16
- 61) 二杉茂 (2003) バスケットボールにおけるワンハンドショットの社会史的研究. 神戸学院大学人文学部紀要, (23) : 103-129
- 62) 二杉茂 (2009) ワンハンドショットのメッセンジャーたち：バスケットボールにおける社会史的研究. 晃洋書房
- 63) 今井登志喜 (1953) 歴史学研究法. 東京大学出版会, p.20
- 64) 三谷博 (2006) 読者に過去が届くまで. 東京大学教養学部歴史部会編, 史科学入門. 岩波書店, p.1
- 65) 福井憲彦 (2006) 歴史学入門. 岩波書店, pp.13-24
- 66) 福井憲彦 (2006) 歴史学入門. 岩波書店, p.17
- 67) 安川伊三 (1929) 籠球競技法. 目黒書店
- 68) 李想白 (1930) 指導籠球の理論と実際. 春陽堂

- 69) 中房敏朗 (2014) サッカーの技術史・戦術史研究のア
ポリア. スポーツ史学会第28回大会組織委員会編, ス
ポーツ史学会第28回大会発表抄録集. スポーツ史学会第
28回大会組織委員会, p.54
- 70) 中房敏朗 (2014) サッカーの技術史・戦術史研究のア
ポリア. スポーツ史学会第28回大会組織委員会編, ス
ポーツ史学会第28回大会発表抄録集. スポーツ史学会第
28回大会組織委員会, p.55
- 71) 會田宏 (1994) ボールゲームにおける戦術の発達に関
する研究. スポーツ運動学研究, (7): 26
- 72) 岸野雄三 (1973) 体育史: 体育史学への試論. 大修館
書店, p.275
- 73) 油井大三郎 (2006) 記憶と史料の対抗. 東京大学教養
学部歴史部会編, 史料学入門. 岩波書店, p.208
- 74) 岸野雄三 (1957) 体育の歴史的研究法. 日本体育学会
編, 体育学研究法. 杏林書院, p.374
- 75) 及川佑介 (2011) 松本幸雄と「籠球研究」(昭和9~11
年) 日本バスケットボール史の一齣. 叢文社, pp.54-57
- 76) 日本バスケットボール協会広報部会編 (1981) バス
ケットボールの歩み: 日本バスケットボール協会50年史.
日本バスケットボール協会, p.98
- 77) 和田信賢 (1935) 籠球放送雑感. 籠球, (13): 88-89
- 78) マイネル: 金子明友訳 (1981) スポーツ運動学. 大修
館書店, p.261
- 79) 金子明友 (1968) 運動技術論. 岸野雄三代表, 序説運
動学. 大修館書店, p.109
- 80) 朝岡正雄 (1999) スポーツ運動学序説. 不味堂出版,
p.197
- 81) 吉井四郎 (1986) バスケットボール指導全書1: コー
チングの理論と実際. 大修館書店, p.193
- 82) 金子明友 (1974) 体操競技のコーチング. 大修館書店,
p.238
- 83) 谷釜尋徳 (2008) 日本におけるバスケットボールの専
用球の改良とそれに伴うドリブル技術の発達に関する技
術史的考察. スポーツ運動学研究, (21): 45-59
- 84) 吉井四郎 (1986) バスケットボール指導全書1: コー
チングの理論と実際. 大修館書店, p.238
- 85) 吉井四郎 (1986) バスケットボール指導全書1: コー
チングの理論と実際. 大修館書店, p.238
- 86) 吉井四郎 (1986) バスケットボール指導全書1: コー
チングの理論と実際. 大修館書店, p.35
- 87) 朝岡正雄 (1999) スポーツ運動学序説. 不味堂出版,
p.196